

お仙物語

むかし、麦谷にお仙という美しい娘がいました。気立てが優しく、控えめなお仙さんは「お仙さんをぜひ、うちの息子の嫁にいただきたい」

「水内谷のお仙さん、水内谷の小町」

と騒がれましたが、お仙さんはどんな縁談も断ってきました。お仙さんは、暇さえあれば家の裏山の祠にお参りし、しばらくあたりの景色に見とれていました。

小鳥のさえずりに耳を傾けたり、野原の草花を採ったりして楽しむ、心の優しい娘さんでもありました。

ある年、不明谷（あけずだに）の森林を奉行が視察に来ることになりました。村の人々は出来るだけ奉行に接待をして、山に入って薪を採ったり用材を伐るのを有利にしておこうと考えました。

奉行が来た当日は、川で鮎漁をお目にかけ、捕った鮎で鮎料理を出しました。接待に出た娘さんの中に、お仙さんも入っていました。美しいお仙さんに目を留めた奉行は、

「これだけの美形の娘は、京の都にて宮仕えするのが村のためにもなる。さよう心得よ」と有無を言わずつれて帰りました。

奉行は「京の宮中に仕える」と村の人々に言ったが、事實は、奉行が無理やり館に連れ帰り、側室にしようとしていました。いくら迫られても言うことを聞かないお仙でした。

お仙は家の裏山で眺めた景色や、小鳥のさえずり、野辺の草花など故郷の事が忘れられず、「帰りたい、帰りたい」「国原の家に帰りたい。家の裏山に登りたい」

奉行の言うことを聞かないお仙はついに、館の裏庭で打ち首になりました。しばらくしてその屍から蛇が川伝いに国原に帰ってきました。お仙の故郷恋しさの一念が、蛇に化身したのです。お仙のたましいは怨念を抱いて迷いに迷いさまよい、岩に籠りました。その周辺は妖気が漂い、出入りする人々にもいろいろなことが起こり、村の人たちは、「蛇神様」といって恐れました。

ある人がこの藪に入り、竹の杭が突き刺さったが、抜いて竹藪に返したら、直ちに痛みもやみ傷も治ったとか、この藪を手入れした家では、妻が病気になったとか、ある人が藪の笹の葉を籠に入れて帰ったら、中に蛇が入っていました。

今では、荒れ果てた藪はすっかり整理され、杉林の中に日射しも見られる明るい場所となっています。後の人々が立派な鳥居や石段を作り、由来碑も設けました。

国原神社の裏側道上の杉林の中に直径二メートルくらいもある大きな苔むした岩があり、その上に直径四十センチもある古木がどっかりと岩を取り巻くように太い根を張っています。その様子が、いくつもの蛇が岩を巻き包んでいるようなので、これをお仙塚又は蛇塚と呼んで語り伝えてきました。お仙塚の由来を刻んだ石碑には次のように書いてあります。

“昔麦谷村百姓辰見屋にお仙と申す娘あり 美女にて京に召され宮仕え候ところ、かかる田舎なれども故郷忘れ難くにや、ふるさとへ帰りたく暇を願いおれども、一向にお暇無くむなしく相成り候ところ、ついに不慮にてあい果て申す由、夫より娘の靈魂郷里に帰り執

念蛇に化身し、この岩に籠れりと伝えられる。村人今に至るもこの岩をお仙神として祭る。

右は 松平少将源吉長様 御世 御代官 藤川治左エ門殿
杉田新兵衛殿

寛延三年庚午四月二十三日

“

なお、この碑は昭和五十三年一月に奉納されている。